

平成27年度病虫害発生予報第3号

平成27年5月13日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病(葉いもち) 縞葉枯病(ヒメトビウンカ) ニカメイガ	平年並 やや早い やや早い	やや多い やや多い やや少ない
		イネミズゾウムシ	早い(中～平坦地) やや早い(山間地)	やや少ない
果樹	ナシ	黒斑病 黒星病 クワコナカイガラムシ ハダニ類 アブラムシ類	平年並 平年並 やや早い やや早い やや早い	平年並 やや多い 平年並 平年並 平年並
	果樹共通	カメムシ類	平年並	平年並
野菜	スイカ	菌核病 つる枯病 うどんこ病	平年並 平年並 平年並	平年並 平年並 平年並
	スイカ、メロン	アブラムシ類 ハダニ類	平年並 平年並	やや多い やや多い
	ネギ	べと病	やや早い	やや多い

気象予報(抜粋)

1か月予報(5月9日～6月8日:5月7日、広島地方气象台発表)

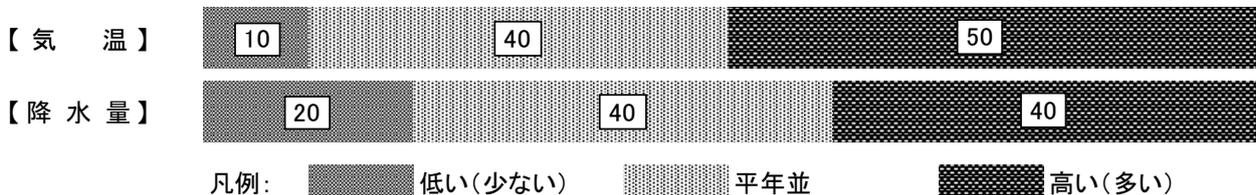
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ない見込みです。

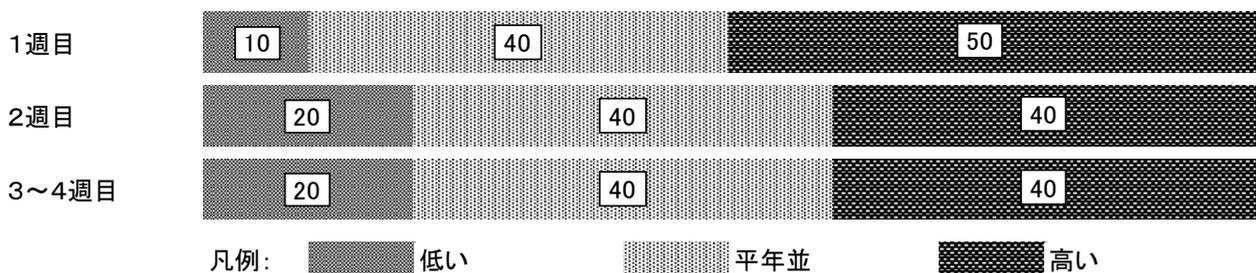
向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または高い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[イ ネ]

1 いもち病（葉いもち）

（1）予報の内容

発生地域 県内全域
発生時期 平年並
発生量 やや多い

（2）予報の根拠

ア 前年の穂いもちの発生は多かったため、種子の保菌率は平年より多いと見込まれる。また、4月下旬～5月上旬が高温で経過し、今後も気温の高い日が多いことが見込まれるため、苗いもちの発生に助長的である。

イ 向こう3か月の気象予報から、発生時期は平年並と見込まれる。また、7月は平年に比べて曇りや雨の日が多いと予想されていることから、葉いもちの発生に助長的である。

（3）防除上注意すべき事項

ア 苗におけるいもち病は急激に蔓延するため、発生がみられた場合は直ちに葉いもち防除用粉剤又は水和剤を散布し、その後は病勢に応じて追加防除を行う。使用薬剤については、病害虫防除指針等を参考にする。

イ 育苗箱施用剤を使用する場合は、使用時期及び使用量を守って均一に散布する。

ウ 山間部などのいもち病の常発地では、育苗箱施用剤を使用しても十分な効果が得られない場合があるので、ほ場の見回りなどを行い早期発見に努める。

エ 補植用置き苗が本田での発生源となることが多いので、補植後の残り苗は速やかに処分する。

オ 本県では、ストロビルリン系薬剤耐性菌の発生により、本年度から本系統薬剤の使用を控えるよう指導している。

2 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

（1）予報の内容

発生地域 県内全域
発生時期 やや早い
発生量 やや多い

（2）予報の根拠

ア これまでの気温の推移、及び向こう1か月の気象予報から、本病原ウイルスを媒介するヒメトビウンカの発生時期は平年よりやや早いと見込まれる。

イ 前年の本病および、ヒメトビウンカの発生は多かった。

ウ 本種に有効な育苗箱施用剤が広域で普及している。

（3）防除上注意すべき事項

病害虫防除指針等を参考にして、ヒメトビウンカに対して登録のある育苗箱施用剤を使用して防除を行う。

3 ニカメイガ

（1）予報の内容

発生地域 県内全域
発生時期 やや早い
発生量 やや少ない

（2）予報の根拠

ア これまでの気温の推移、及び向こう1か月の気象予報から、本虫の発生時期はやや早いと見込まれる。

イ 前年の第2世代幼虫の発生量は少なかったため、本種の越冬量は少ないもの

と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

常発地では、病害虫防除指針等を参考にして、本種に対して効果の高い育苗箱施用剤を使用する。

4 イネミズゾウムシ

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	早い(中～平坦地) やや早い(山間地)
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月11日現在、予察灯への誘殺は確認されていない。

イ 5月11日現在、有効積算温量から推測された越冬世代成虫の水田進入開始期は、中～平坦地では5月1日(平年：5月8日)で平年より早く、山間地では5月18日(平年：5月22日)で、平年よりやや早い。

ウ 前年の第1世代成虫の発生量はやや少なかった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗箱施用剤の防除効果が高いので、使用時期及び使用量を守って1箱ずつ均一に薬剤を散布する。使用薬剤については病害虫防除指針等を参考にする。

イ 育苗箱施用剤による防除を行っていても本田での食害が急増する場合には、病害虫防除指針等を参考にして、追加防除を行う。

ウ 直播栽培などの育苗箱施用剤を使用していない水田において、被害葉が顕著に増加し、成虫密度が1株当たり0.5頭以上になった場合は、病害虫防除指針等を参考にして、粒剤などで防除を行う。

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア ナシ園における越冬菌密度調査の結果によると、短果枝の病芽率はほぼ平年並であったが、一年枝上の枝病斑数はやや多かった。また、病枝率もやや多く、一部で病枝率の高い園が認められた。

イ 県予察ほ場における開花期以降の孢子飛散数は平年並に推移している。

ウ 4月下旬に行った県内12園の巡回調査によると、幼果のポリ袋検定法による発病果率は0.4%(平年：1.8%)と平年に比べやや低かった。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今後、気温の上昇とともに孢子飛散数の増加が予想されるため、出来るだけ早く小袋掛け作業を終了する。特に、降雨直後は孢子飛散数が増加するため、薬剤防除を徹底する。

イ 薬剤は、小袋掛け直前にユニックス顆粒水和剤47の1,500倍液、有機銅水和剤(キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル)1,000倍とポリオキシシリンAL水和剤1,500倍の混用液、ポリベリン水和剤1,500倍液など、小袋掛け終了後には有機銅水和剤(キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル)1,000倍液などを散布する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア ナシ園における越冬病芽調査の結果によると、腋花芽の病芽率は平年に比べやや多かった。

イ 4月上～中旬に降雨日が多く、ナシ黒星病の発生を助長する気象条件で経過し、県予察ほ場における花そう基部からの分生子の飛散量は、4月上～中旬には平年に比べやや多く推移した。

ウ 天候不順により、開花前後に防除ができなかった園、散布間隔が例年より長くなった園が認められた。

エ 5月上旬現在、幼果や葉の発病が多い園が散見される。

オ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病した幼果や葉は取り除き、園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤は、ユニックス顆粒水和剤47の2，000倍液、チウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500倍液、有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1，000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ベルコートフロアブル1，500倍液、ファンタジスタ顆粒水和剤4，000倍液などを散布する。

3 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 前年度、本害虫による果実被害は平年並であった。

イ 越冬卵のふ化開始は、平年よりやや早い4月30日（平年：5月4日）に認められ、ふ化最盛期は平年よりやや早い5月6日前後（平年：5月11日）であったと見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在、幼虫のふ化終期にあたる2回目の防除時期（5月11～15日頃を目安とする）となっている。

イ 薬剤はアプロード水和剤1，000倍液などを使用する。

ウ 越冬世代は、第1世代及び第2世代よりふ化時期が揃いやすいので防除を徹底する。

エ 薬剤の散布にあたっては、クワコナカイガラムシが集合する枝葉の他、枝の切り口及び粗皮下などにも薬液が十分かかるようにする。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア クワオオハダニの越冬卵のふ化最盛日は、平年よりやや早い4月23日（平年：4月27日）であった。

イ 5月上旬現在、県予察ほ場におけるハダニ類の発生量は平年並となっている。

(3) 防除上注意すべき事項

ハダニ類の発生が多い園では、カネマイトフロアブル1，500倍液などを散布する。

5 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月第1半旬現在、県予察ほ場におけるワタアブラムシの寄生新梢率は8.3% (平年: 8.0%) で、発生時期、発生量ともに平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、アブラムシ類の第1回目の発生盛期は平年よりやや早い5月中旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア アブラムシ類の発生が多く認められるナシ園では、アドマイヤーフロアブル5,000倍液またはウララDF4,000倍液などを散布する。

イ アドマイヤーフロアブルなどのネオニコチノイド系殺虫剤の使用にあたっては、連用による薬剤抵抗性の発達を避けるため、最小限の使用とする。

[果樹共通]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、予察灯及び集合フェロモントラップにおけるカメムシ類の誘殺数はほぼ平年並である。

イ 一部の果樹園ではカメムシ類の寄生が確認されている。

ウ 向こう1か月の気象予報から、カメムシ類の発生時期は、ほぼ平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア カメムシ類の発生が認められるナシ園では、ジノテフラン水溶剤 (アルバリン又はスタークル顆粒水溶剤) 2,000倍液などを散布する。

イ ナシ以外の樹種における散布薬剤は、各地域の防除暦等を参考にする。

野 菜

[スイカ]

1 菌核病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場において本病の発生は認められていない。

イ 本病はやや低温 (15~20℃) で、降雨が続くと発生が多くなる。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。咲き終わった花卉は早く摘み取って除去する。

イ 薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、カンタスドライフロアブル1,500倍液、ロブラール水和剤1,000倍液などを散布する。

ウ 曇雨天が続く場合は、ハウスではスミレックスくん煙顆粒6g/100m³ (床面積50m²×高さ2m)、ロブラールくん煙剤100g/300~400m³ (高

さ2 m、床面積150～200 m²) などを使用する。

2 つる枯病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は降雨や過湿によって発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないよう、換気を行う。トンネル栽培のスイカでは、茎葉に雨がなるべくあたらないようにトンネルを開閉する。

イ 本病は、株元や雨滴のあたる箇所から発病しやすいので、薬剤散布は株元にも薬液が付着するように丁寧に行う。

ウ 薬剤は、マンゼブ水和剤(ペンコゼブフロアブル又はジマンダイセン水和剤)600倍液、アントラコール顆粒水和剤600倍液、ダコニール1000の1,000倍液などを散布する。

3 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は、25℃前後の気温と適度な湿度で発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病は、収穫期の草勢低下により発生が多くなるので、初期防除を徹底する。

イ 発生前には、ベルコート水和剤1,000倍液などを散布する。

ウ すでに発病のみられるほ場では、トリフミン水和剤5,000倍液などを散布する。

エ つる枯病が同時に発生している場合には、ポリベリン水和剤1,000倍液などを散布する。

[スイカ、メロン]

1 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、県予察ほ場(東伯郡北栄町)における有翅アブラムシ類の黄色水盤への飛来量はやや多い。また、現地調査ほ場において、アブラムシ類の発生は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には防虫ネット被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ 発生初期の防除に努める。スイカのハウス栽培では、着果後にウララDF2,000倍液などを散布し、その後発生した場合にはモスピラン顆粒水溶剤2,000倍液などを散布する。

ウ スイカのトンネル栽培では、つる引き誘引時期にチェス顆粒水和剤 5, 000 倍液、交配前にモスピラン顆粒水溶剤 2, 000 倍液、着果後にウララDF 2, 000 倍液などを散布する。

エ メロンでは、チェス顆粒水和剤 5, 000 倍液、バリアード顆粒水和剤 4, 000 倍液、ウララDF 2, 000 倍液などを散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場において、ハダニ類の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

スイカ、メロンともに、発生初期にバロックフロアブル 2, 000 倍液を散布する。その後発生が見られた場合はマイトコーネフロアブル 1, 000 倍液、ダニサラバフロアブル 1, 000 倍液などを散布し、多発した場合にはコロマイト乳剤 1, 000 倍液を散布する。

[ネギ]

1 べと病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、県西部の現地調査ほ場における発生量はやや多い。

イ 本病は、15～20℃程度の気温で降雨が続くと発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病後のまん延は早いので発病前からの防除に努める。

イ ランマンフロアブル 2, 000 倍液、アリエッティ水和剤 800 倍液、ペンコゼブフロアブル 600 倍液などを予防散布する。

ウ 発病を認めたら直ちに、リドミルゴールドMZ 1, 000 倍液、フォリオゴールド 1, 000 倍液、レーバスフロアブル 2, 000 倍液、フェスティバルC 水和剤 1, 000 倍液などを散布する。

エ 同一成分を含む薬剤は連用しない。また、成分ごとの総使用回数に注意して薬剤を選定する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jpnn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病虫害防除所

(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※ 予報第4号の発表は、6月3日（水）の予定です。